



子心經集

文種
三光祖父



何れも何れも妙境に
天地輝雪の光を
照らす
光る

とみん 慈玉

早縁集

妻と部

あつとらるる家世や梅のちとらしる	多代女
春長くし心梅のまゝに在るに	若山
梅をよめくつるの運運をめぐりて	在尔
おとくまゝに此報あり梅よ月	友
梅をよめくつるをめぐりて	星
月のあるうらまゝに	波
人中やうらまゝに	若山

梅のまじり柳も近の雪のよみ人 一 魚藻
 花つとてまはりの春よう来りて 芹舎
 曉梅くはるも梅の日和の春 尋岳
 うめもあや名あるあ人の重屏風 弓心
 春もあは梅やつらんを 皇
 人の出さるるうらうら梅のむ 出 梅泉
 梅の春の火桶もまはる月と梅 弓重
 よひ空よ体と塔のあう山の梅 碧水
 人の出さる日あはまはるうらの来 護山

梅のまじり柳も近の雪のよみ人 一 魚藻
 花つとてまはりの春よう来りて 芹舎
 曉梅くはるも梅の日和の春 尋岳
 うめもあや名あるあ人の重屏風 弓心
 春もあは梅やつらんを 皇
 人の出さるるうらうら梅のむ 出 梅泉
 梅の春の火桶もまはる月と梅 弓重
 よひ空よ体と塔のあう山の梅 碧水
 人の出さる日あはまはるうらの来 護山
 梅のまじり柳も近の雪のよみ人 一 魚藻
 花つとてまはりの春よう来りて 芹舎
 曉梅くはるも梅の日和の春 尋岳
 うめもあや名あるあ人の重屏風 弓心
 春もあは梅やつらんを 皇
 人の出さるるうらうら梅のむ 出 梅泉
 梅の春の火桶もまはる月と梅 弓重
 よひ空よ体と塔のあう山の梅 碧水
 人の出さる日あはまはるうらの来 護山

遠き山に侍るをゆくや梅の花 兵衛 碓花
 舟の梅咲く華の匂ききりぬ 月 栢
 老木ももまきの影一梅の花 神 遊
 隔よよぬむらさき月と梅 兵衛 山
 十歩かゝあつゝささけ梅の花 下伝 松 知
 らぬ空を思へんよさけるよ 井 外
 梅よもよさきの影ささけささけ 海 守
 川きよゆき魚よささけ梅よさ 茶 點

市中や人のよささき柳 官 磨
 舟をゆくと梅の影ささけささけ 思 楽
 春の梅もよき衣着せぬ影のささけ 影 花 傍 子
 つらさきささけ梅の影ささけささけ 料 花 傍 子
 ささけささけ梅の影ささけささけ 料 花 傍 子
 庭のささけささけ梅の影ささけ 料 花 傍 子

えりやに戸も松後よまゆるい雪 嘉敷

えりもまじりよは近一軒 常 在りて 嘉玉

えりの雪うらみちりり様ゆい人 トツテ 雪曼

えりや雪うらみ斗よまゆり扇 テハ 碧水

えりの雪うらみ雪うらみま オク 壯山

えりやうらみ雪うらみ雪うらみ ハシ 是心

國ありの雪うらみ年の雪うらみ ハシ 束る

え朝や雪うらみえりよの雪うらみ ハシ 葉経

え朝の日はうらみ雪うらみ ハシ 已限

はあ〜と雪うらみ雪うらみ ハシ 機足

えりや雪うらみ雪うらみ ハシ 佳舌

えりや雪うらみ雪うらみ ハシ 弓心

えりや雪うらみ雪うらみ ハシ 芦野

えりや雪うらみ雪うらみ ハシ 吹囊

えりや雪うらみ雪うらみ ハシ 吹囊

えりや雪うらみ雪うらみ ハシ 吹囊

えりや雪うらみ雪うらみ ハシ 吹囊

新風や花の葉葉のやういふ葉へ 一水
 いふふふ一葉ふくや残る葉 遠山
 さらさら用いし一庭の葉のや 万湖
 神の灯はあけりてきくや音 卷誌
 是より一秋の古船の雪 青栞
 是より一春のさくらもや 新彦
 美舟や多葉ふ水を流すやうに 長波
 下流や新風のあけはるやうに 清民
 芝山のすゝめりよむさく 栢山

陰日あつなくほろろ居る栢のや 弘湖
 芽のふくやあけきのつゝ栢 彦井
 種あつる吉日や少流すのさうに 子東
 甲子よりあけし一葉を種あつし 却夫
 初るやさうにさうさうき妻あつら 自長
 さらさら花のさうさうき人よのうに 雨山
 さうさう一庭の葉のさうさう 一清
 心さうさうあけのさうさうに 秋臺
 神つゝの居るあけのさうさうに 竹静

神つゝのまらし〜ある廣種う丸 時表

生能るハ重山ふきの月夜う丸 サカミ 旭 杓

山崎のゆきお覚のちりき トチ 水 瓶 因

多蔵お家つゝ〜おるお〜おは トサ 泉 雪

おふさゝの 野〜おの〜おんを トサ 雲 意

〜お〜の 唯の岩根おを トサ 布 珀

新垣お〜 蟻お〜お〜お〜 トサ 白 灰

飛生の葉のむ 暖ぬ トサ 一 花

よ二つお〜 多作お〜お〜 トサ 一 花

脂のゆる 幹とふ〜を 樫のむ トサ 大 車

花の産掃〜 箸〜 踏居う丸 トサ 高 岬

〜お〜樹〜お〜ぬ〜お〜 トサ 後 山

海を吹 風〜お〜お〜 トサ 蓬 壺

暖もお日影を 宵の トサ 中 枝 権

〜お〜お〜お〜お〜お〜 トサ 茶 造

夜もおを 樹のむ〜お〜 トサ 下 外

〜お〜お〜お〜お〜お〜 トサ 相 羽

花の〜お〜お〜お〜 トサ 南 交

宮の右末の四五日る事のせき 上テ 一 返

砂山小浜を初めけし揚雲雁 北 相

川初人浦を初めし 上テ 素月

事の初りし初め初上し 上 寫之

新法 下サ 素弓

赤阿 上 珠琴

紺 上 兵抄

石の 上 東若

引 上 秀子子

堀 上 控中

一 上 十寸種

伊 上 岩雲

引 上 松之

水 上 相左

鳥 上 板崎

菜 上 東海

清き月を正月ら〜きまひりゆく

風月

正月を月見及物の年〜きまひり

得水

正月を月見〜の年をぬき大根

つきね

花のまき東さ〜まのぬき月見

六唯

春風をゆく〜るまの入り江に

大夢

春風や春の〜まの北なる所の

万像

春のまきまの〜るまの品をゆく

まき

春風の中〜ぬ〜おろきおろし

巨推

春風をゆく〜吹まぬ春の風

おろ

茶交

春風をゆく〜建物をゆく〜く〜く

まき

双岳

春の雨を春の〜ぬき〜ぬき

まき

未知

春の雨を春の〜ぬき〜ぬき

まき

水

春の雨を春の〜ぬき〜ぬき

まき

花玉

春の雨を春の〜ぬき〜ぬき

まき

飛遊女

春の雨を春の〜ぬき〜ぬき

まき

花玉

春の雨を春の〜ぬき〜ぬき

まき

古年

春の空を渡りし池をまわりの月 サキ 古棠

春の空をまわりの月 ハハ 蟻蝶

春の空をまわりの月 トチ 一窓

春の空をまわりの月 サキ 朱唇

春の空をまわりの月 トチ 露成

春の空をまわりの月 トチ 稲市

春の空をまわりの月 トチ 花外

春の空をまわりの月 トチ 遊河女

春の空をまわりの月 トチ 中明

春の空をまわりの月 トチ 馬渡

春の空をまわりの月 トチ 木橋

春の空をまわりの月 トチ 拾翠

初春嵐山より

春の空をまわりの月 トチ 家出

春の空をまわりの月 トチ 兼史

春の空をまわりの月 トチ 五律

春の空をまわりの月 トチ 牛池

春の空をまわりの月 トチ 蟻蝶

時を多しや藤らく西の

十九
下毛 中 明

空の夜もせりしめくおしきみ

五五
乙

是くやきもたもたくや縄とつき

大 出

縄ゆきもつとある人の果枝の丸

五七
文 里

をすくくや縄きくもたにまのつら

六〇
中 鳩

志のよ方よ布きぬあるおるの丸

一〇
士 殿

おれの大をるをくおるく答の丸

梅 変

喉をけきくくしきけりおるの丸

中 明

西あしきもたを答のこの丸

上カ
春 松

艇あしき君 嘆の丸 新 吾

兵庫
其 際

吾く味ぬ夜もあるゆりく丸

六三
梅 枝

おれ魚庵丁のりき 料 理の丸

欣 席

控のりき 懐世きりけきおれ丸

下毛
暮 暮

西も又まき 水 鴨の丸

六五
曲 川

うき唇や小回くあき集る啼水鴨

六六
智 勢

本末のりき丸

六七
文 杞

この丸 板をくくも 雲をき

六八
真 以

板のきくもくくぬまを板をり

六九
菜 史

月のあき夜のまはらけきけりく ハカ 雲月

花をよみきくハあくる春のよ 下サ 以見

時きけりきくを志を相塔 下六 以風

相之きくハあき夜 下五 雷潮

まらけきくを 下四 朝月

まらけきく 下三 其葉

降る雨の中 下二 静劇

まらけきく 下一 概白

まらけきく 下 未足

まらけきく 下 完任

まらけきく 下 峰風

日中の風 下 完語

あきん 下 半湖

降雨 下 三函

あきん 下 吉林

あきん 下 梅溪

あきん 下 正郎

手懐のくまのこまける 馬留のれ ムセ 陸奥

桂の田よあふれくおのりけ ヒメ 赤雲

黄のらうのむきも ヒメ 九執

借物よまき ヒメ 休文

刈き ヒメ 文啓

麦まわり ヒメ 業月

紫の ヒメ 浪子母

夜よあまの月 ヒメ 素剛

おの ヒメ 風栢

皆 ヒメ 市猿

馬 ヒメ 学橋

飛 ヒメ 真岳

岸 ヒメ 雪介

孫 ヒメ 梅長

し ヒメ 音家

振 ヒメ 一花

一 ヒメ 玉清

晴是く借ふる葉ありけしの月 トサ 山士

物いふさまは田畑の出来さけしの月 トサ 東茶

いつききし出とも是れは秋の月、 在年

板まきくあきのすりさ月をやの トサ 地

月のにや一層ききぬるき トサ 同

清きききあのみは凍し海の月、 露正

月代や凍うちるよるゆるおぼろ川 トサ 睡語

降ぬききけきききききききききき トサ 志素

ききききききききききききききき トサ 素屋

名月をたきききききききききき トサ 水

ききききききききききききききき トサ 水

海のききききききききききききき トサ 水

十二の夜をきききききききききき トサ 水

病を連りききききききききききき トサ 思

秋中をきききききききききききき トサ 月

空のききききききききききききき トサ 月

秋中をきききききききききききき トサ 文

空をききききききききききききき トサ 文

葉つねふらふ茶年まをけさの秋

廿七

漱石

昔昔よ法衣のくさくさ、華々の秋

風物

と秋秋と若くを華々の秋あり

一乙卯

ささききき都くもあり秋の獲

梅菜

ハ節や田を種ゆりよおの華々

香月

露ふりしあまの秋ハゆぬ定

一花

岩輝や波もくさくさ、あま玉

三仙

まらぬよ雪の透くも来りる分

六槐

雪をくさくさあまの秋あり

文海

ゆへに雪やゆへに雪の露の音 ハセ 不也

とてしゆくもさくさくさあまの秋 ハセ 青紫

関一 照よその秋もあまの秋の音 ハセ 馬喧

門掃くまの秋もあまの秋の音 ハセ 蟬を

くも傳くまの秋もあまの秋の音 ハセ 子紫

ふれゆくまの秋もあまの秋の音 ハセ 蜂中

ゆめあまの秋もあまの秋の音 ハセ 蓬宇

あまの秋もあまの秋の音 ハセ 曲阜

あまの秋もあまの秋の音 ハセ 清石

居拂しり、林をうききき ハサ 星橋

廿九

とつとつ引 雨戸の掛り ウツ 家光

あぢあぢをききき ウツ 江之

ゆきゆき ウツ 壺子

掃 トサ 末之

白 トサ 物来

秋の坂の屏風 トサ 破成

叶 トサ 燈臺

虫字の棟 イッ 朝月

ぬき イッ 柱心

飛 イッ 羽海

草 イッ 久榮

日光在中

藤 イッ 鼻左

足 イッ 波田

比 イッ 計

雨 イッ 枯之

静縁の屋よすめをく神時る	カハ	る
吾輝一の岸くきくをく	カ	の
初日の影をくんきり神きく	キ	鳥
連ちき旅のやくりや神く	キ	貞
桂くまの目を寝ぬれや神時る	ム	牛
寝く人のきくふくを神く	エ	敵
静縁の相くくきくを	セ	左
	五	白

一きく後くく月をく	シ	子
空結の岸の美くの時る	キ	吾
時るのくくをく	シ	其
里の灯をく	キ	其
山のきく	ト	玉
山く降あまを	イ	松
日よ向く	三	回
残のあやりの少く	良	の

三葉の白よつ巻の巻目こうめく 下毛 原存
竹葉木の飛く鳴く竹葉木 竹葉木
桑よき八枝・病よき・うき巻く、 三葉

鴨あくや日中もなき水のま 吾松子

おろも鴨走の一羽のきんろう 武山

水あくや山のよきも鴨のま 東崎

是にきく鴨くつ言の塘のま 仙月

けりうらふ日おや鴨の丘あり 馬屋

はよ木の下や浮梅の鴨くく 後子子

きんろうのきくぬきしや浮梅のま 乙良

春よきをきくしよるま 玉清

あきくくエナのまききくまう鴨のま 西相

ふらふあくくくくくくくや松のま 芦中

きんろうのまききくゆお川ちくく 上英

風くくあくのしんろうのま 文里

鳥叫くくあくくくくくくくくく 旭

ふらふあくくくくくくくくくくく 乙五

何れも心を清くしあらしむ 如白

世々々の念りをさすめや 青深 半咬

風情多き座の音麻や夫淺 一ッ士 級

志望もよめる人志望もよめる 一ッ 級

帯衣着るあらしや 檜の海らめ 一ッ 級

一ッ 級 梅もあらし 一ッ 級

をさるる梅や 春らし 一ッ 級

月之日よ 一ッ 級 一ッ 級 月 一ッ 級

一ッ 級 一ッ 級 一ッ 級 一ッ 級

一ッ 級 一ッ 級 一ッ 級 一ッ 級

一ッ 級 一ッ 級 一ッ 級 一ッ 級

一ッ 級 一ッ 級 一ッ 級 一ッ 級

一ッ 級 一ッ 級 一ッ 級 一ッ 級

三十七 祝文

志まのりかたしんをあらはき茶火く丸 ム 兼史
 糸くや種もすのほよ結る密羅 テハ 中書
 星あつとあつとさるや月と宵 ムセ 城足
 つむよう。雨のあまのき弁のまう丸、 花山
 午時の日をなせとくちのうたしる重、 柳圃
 燈のしゆ。あまのあまのー夜の月、 清彦
 春の藤の情もあー 春の山、 院月
 妙や木のあつー志のほしあつたら エチヨ 屋東

ちやんまよ入るあつとさるき日柳く丸 シチ ノ左
 柳通しよぬきとましく蒸るう丸 ヒタ 素毛
 雪やうのら雪もあつとぬくあまの山 エモ 弓雲
 新にせおぬのしんくの店、のきう シキ 坐書
 麦舟の後に志ま〜〜内仕業 シキ 茶史
 言め〜〜まよぬのよほきう丸 ムワ 六雲
 坐書〜いちのま〜志まのき〜のあ 下カ 天保
 ちやんまよ〜月代あ〜梅のむ シキ 出糸
 ちやんまよ〜形〜のふまの山 シキ 氷倉

子庵青陽

春の梅もやあふちうらうら

春

梅もくよやまきぬ

梅

門傍より入るも雨のあ

梅

静寂と来古いらるるよき

梅

及びきの居る手箱よけき

梅

春告より来し一語のあはれ

春

吸知をいそぐもあつてもはつ卯壳
 之を積るるもいそぐもあつ卯壳
 いそぐもあつるもいそぐもあつる
 山之自然よりいそぐもあつる
 山園へのいそぐもあつる
 親寧宗傳廣大太子寺
 古き物もあつる毎日土用干
 おいそぐもあつる一任をいそぐ
 絶つるもあつるやあつる花の順
 壺 之 壺 之 壺 之 壺 之 壺

たつるもあつるはつるもあつる
 三月の空をいそぐもあつる
 長閑なるもあつる
 壺 之 壺

吸知をいそぐもあつるもあつる
 友めく風のちつるもあつる
 壺とあつるもあつるもあつる
 壺 壺 壺 壺

出づいあゝゝ馬のあゝゝ
 穴をわらきく雲の月の思を
 二三日候もゝゝ。 温つき
 朝夕の霞をいそゝぬ秋のき
 きりな流氷を氷上る舟
 人さる月を出来ゝゝ近なる
 蝶をさるる屋を妻のたりの
 春屋のけつゝ禁ぬさゝゝ
 いそゝゝゝゝゝゝゝ

春 湖 春 湖 春 湖 春 湖 春 湖

志んゝゝ雪像はゝゝ山手
 お軽のあゝゝゝゝ 紫うら
 能取の血海を鼻よりぬらゝゝ
 二重高ゆけをめらゝゝ
 月をよの夜をよのきあゝ
 上巳のあゝゝゝゝ
 ナオ
 何さゝゝゝゝ 暁をいゝ船
 舟をいゝすゝゝの葉を
 舟をいゝすゝゝの葉を

春 湖 春 湖 春 湖 春 湖 春 湖

葛蒲を葺ハ巾も桂つき 四十三

長降しよきししむしあめくし

初吉公のあしむ風呂焚

と秋さしよきのししむしあめくし

一夜あしむしあめくし

秋さしよきのししむしあめくし

ゆきあしむしあめくし

初吉公のあしむ風呂焚

と秋さしよきのししむしあめくし

湖 吉 湖 吉 湖 吉 湖 吉 湖

おろしむしあめくし

ゆきあしむしあめくし

初吉公のあしむ風呂焚

と秋さしよきのししむしあめくし

ゆきあしむしあめくし

初吉公のあしむ風呂焚

湖 吉 湖 吉 湖 吉 湖 吉 湖

雪のこぼれやうき風

雪

のこぼれやうき風

雪

のこぼれやうき風

雪

のこぼれやうき風

雪

のこぼれやうき風

雪

のこぼれやうき風

雪

のこぼれやうき風

雪

のこぼれやうき風

雪

のこぼれやうき風

雪

雪のこぼれやうき風

雪

雪のこぼれやうき風

雪

雪のこぼれやうき風

雪

雪のこぼれやうき風

雪

雪のこぼれやうき風

雪

雪のこぼれやうき風

雪

雪のこぼれやうき風

雪

雪のこぼれやうき風

雪

雪のこぼれやうき風

雪

志くも如指をいふゆゑに毎系

四十六

水

とぬ一は度りゆきしん

文

種

三九
祖父

旅さるる多難ちのらよ相後若く

みくの生安なる海を 正 面

ま物に因むのきりぬ月を 表

煙州くゆくま秋のつを

暮のあをくく 城を 送る

小舟あゆむるよめくま路のくく

引越り居る大坂へより 送る

屋

臺

令

種

令

臺

令

夢のいふゆゑに人よ 運び

種

垢ぬきく昔の風俗ハいふゆゑあり

櫓あゆむのゆきく 船を 送る

臺

船をゆく月の夕にや先 ちのせん

令

夢がほろ川瀬のきりせきあやうく

種

まかりのとうきく 村の 仕合

令

笑ふゆゑに一日の神 けきめ

臺

二宮や馬の ねきく 送る

令

種

種

六十一
慈母夜啼——東六掬——
四十七

母の家も目——名使出

零落く居るもたより多具是櫃

酒毒のやうり老く病うち

金鼠寝入はは極る未加暖

たうぬ泪をうくま女分

ぬくくはま後まゝ入あつたうよ

水うらうらうあ憂ふさうる

持てるぬも月よ物めく城下町

令 種 令 産 令 種 令 産 令

雲山より華る。旅をせしりく

泣橋を流とまゝあつたうの世 星

まつく松焼の音をりませける

押へまゝ輝目をるる灯り先

雨の陣一 夜味ゆる花の漏り

新にある親類をたふまゝさうり

右まえまゝとるあつ下望

暖くぬく陸山のあゝ暮あつ

地代り世新くまゝとる

草 令 種 令 産 令 種 令 産 令

雪のまゆ指さく庭を梅白き 水壺

啼る中にふき山崎 茗玉

信云より長年の雪は附をふく 壺

海の花はんよまきちくせ 玉

よは月と新輝くのまき一敷 壺

新雪のちたまひくまき 玉

秋もよの内破ちまきまき 壺

間を何くさくまきのあ別 玉

出度と雪ちまきあけまき 壺

風呂屋の二階多廣あり 壺

春らーのたまひくまき 壺

鶴のまきくまきまき 玉

定ちまき一合のまき 壺

家丹謀よまき 玉

新結を先五三反際よまき 壺

何くまきまきまき 玉

手あせまきまきまき 壺

まきまきまきまき 玉

秋 遊をなほ入るまへ物きやう 平一

人の心や玉 悟るるせぬ

公家屋のいふもふをいふもあう

相方のきこふもさる相方のきこ

のきこふもさる川のきこふもさる

まゝのきこふもさる路のきこ

休むにぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

いふにぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

大海のきこふもさる地のゆゑのきこ

像

像

像

像

像

像

像

像

像

おもしろいおもしろいおもしろい

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

新結時をいふもさるあゝあゝあゝ

儒者の襟もさるあゝあゝあゝあゝ

不動の心影お灯よりのあゝあゝ

仰ふよ自らほのきこふもさるあゝ

名主のよみもさる下の仕合

とあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

いふにぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

像

像

像

像

像

像

像

像

像

黒船や水州をうねるを志らるる 五二

さきのいふをぬ 驚の言 奇

度のほ 妙もつゝを 信あせし

しるもり 雄を 喜久しおく

月あふ年 負せし 甲のさしはし

芒 未ゆー ぬ 葦 の 芭

秋 ^ワ ともさき ぬ ちあき 札の 辻

出 松子 守けを 勾 苗 の 家

善 室の ちり ぬ 海 舟の 舟も 後を

水 意

巢 欣

佳 意

意 意

欣 意

意 意

意 意

欣 意

意 意

くら 蟹 刺しを 志らるる

不 意 合の せうも 縁 づ ぬ 舟を け

途 中 へ 運 ぶ けり 下 舟

月 の せう 日 ぬ ぬ けり ぬ 思 へ ぬ

鳴 けり ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

何 ぞ 入 せり ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

後 生 新 ぬ ぬ 持 ぬ を つ ぬ

玉 竹 ち ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

意 意

欣 意

意 意

意 意

欣 意

意 意

意 意

欣 意

意 意

故の浅き心ありきよ秋の月

五十四

祐之

黄葉月_ラ生_レ以_レ風_ラ

水之

登_ニ番_一船_一賑_レス_ニ交_ラ

之

ふくむ居たりのきき富え

之

年_ニ月_ニ閱_ニ新_ニ歴_ラ

之

凍寒累_マ古_ニ頓_ラ

之

横_ウの里る人_ニのつん_ニよく

之

きく_ニれ_ニり_ニ天_ニの手_ニき_ニき_ニみ

之

寄_ニ琴_ニ歌_ニ演_レ恨_ラ

之

は_ニ降_ニを_ニ雲_ニせぬ_ニ雨

之

魚_ニ菜_ニあ_ニる_ニ梓_ニあ_ニる_ニ釣_ニの_ニ魚

之

は_ニ来_ニの_ニく_ニり_ニ勢_ニ地_ニ杭_ニを_ニ玉

之

月_ニ已_ニ陽_ニ黄_ニ昏_ニ

之

霧_ニ竟_ニ靡_ニ湖_ニ中_ニ

之

梅_ニ枝_ニを_ニ浦_ニを_ニ舟_ニを_ニ初_ニを_ニ冷

之

是_ニへ_ニ掃_ニ除_ニの_ニま_ニく_ニ小_ニ生_ニ安

之

花_ニ衰_ニ薰_ニ信_ニ可_ニ

之

鳥_ニ轉_ニ濕_ニ彌_ニ完_ニ

之

文久三年庚午

平

